

豊かさを損ねることなく、つないでいけますか

「サステナブル」を考えよう！

「サステナブル(持続可能な)」や「SDGs」という言葉は、ここ1年で認知が広まってきました。コロナ禍のなかで、持続可能な社会のために大人世代が考え、できることは？
国連広報センター所長の根本かおるさんにうかがいました。

Text: Sachiko Tamura Illustration: Natsumi Suwama

「経済」「社会」「環境」の3本柱で考える

かつては日本人の9割は知らず一部のアンテナの高い人だけが知っていた「サステナブル」。その目標とゴールを設定した「SDGs」という言葉と併せて、ここ1年で認知度がぐっと高まってきたようです。

「今年4月に発表された最新の意識調査^{*}では、SDGsを知っていると答えた人が、全体の54.2%に達しました。世代別で見ると、授業などで学ぶ10代の認知率は7割を超えているのに対して、読者世代の50代女性は残念ながら46.2%と半数にとどかず、もっと広く知ってもらいたい」

と、国連広報センター所長の根

本かおるさんが分析します。

大人世代の50代女性にわかりやすく「サステナブル」を繙いてもらうと、

「それは『つなげていくこと』に尽きます。未来につなげる、世界のあらゆる国の人たちにつなげる。価値観の違う人にもつなげていく。50代の女性に意識してもらいたいのは、私たちが子どものころを過ごした昭和の豊かさを損なわず

に、未来へとつなげていくことではないでしょうか。ここが起点になります」

サステナブルという言葉から連想するのは、地球温暖化や海に漂流するプラスチックごみなど、環境問題に偏りがちですが、実はもっと幅広い問題に関わります。

「まずサステナブルは大きく分け

て、経済、社会、環境の3つの柱があります。それは貧困や経済格差、ジェンダーの平等、多様性。そこに

プラスチックごみの問題や、地球温暖化による気候変動の問題、大気汚染など、あらゆる生活と密接した問題がこめられています」

ターニングポイントになったのが2015年9月に開催された国連サミットでした。

「サステナブルのキックオフ年。今後の世界史の教科書の年表に記載されるほどの大きな出来事(根本さん)」

サステナブルな社会を未来につなげるために、193の国連加盟国が話し合い、17の目標と169のターゲットを掲げ、2030年まで実現させようと定めたのがSDGsなのです。

【理解を深めるワード】

SDGs	COP	脱炭素型社会
Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)の略称で読み方は「エス・ディー・ジーズ」。2015年の国連サミットで2030年までに達成するために掲げた貧困、ジェンダー平等、エネルギー、気候変動など17の目標と169のターゲットのこと。	国連気候変動枠組条約締約国会議の略。1992年、大気中の温室効果ガスの濃度を安定化させるため「国連気候変動枠組条約」が採択、地球温暖化対策に世界全体で取り組むことに合意。26回目の今年は、11月上旬英国グラスゴーで開催。	地球温暖化の大きな要因とされる二酸化炭素の排出量をゼロにするという取り組み。二酸化炭素など温室効果ガスの「排出量」から、森林などの「吸収量」を差し引き、実質ゼロにすることをカーボンニュートラルという。



お話を聞いた方

国連広報センター所長(UNIC) 根本かおるさん

テレビ局でアナウンサー、記者として活躍後、渡米。コロンビア大学国際公共政策大学院卒業。国連難民高等弁務官事務所(UN HCR)に15年間勤務。2013年から現職。

*第4回「SDGsに関する生活者調査」(電通Team SDGs)より。

コロナ禍の前と後で サステナブルは？

2015年秋から15年間かけてSDGsの目標やターゲットを現に向けて積み上げてきたものが、2020年2月に始まった世界的なパンデミック、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、大きく後退してしまいました。

「誰もが予想もなかったパンデミックによって、それまでもひびきが見えていた貧困問題や、飢餓、教育、育児や介護の主な担い手となる女性への負担、ジェンダー格

差など、ありとあらゆる問題が浮き彫りになりました。5年分の歩みがくずれ、十数年分後退した分野もあります。とはいえ、見えなかったこと、直視しようとしなかった問題が可視化できたのは、コロナ禍後の課題につながると思えます。ひとつだけお話しすると、新型コロナウイルスの重症患者を最前線でケアする医療従事者の約7割は女性です。意思決定の立場にある医師は男性が圧倒的に多いですが、病床を切り盛りするのは女性が、病床を切り盛りするのは女性医療従事者が大多数。よく『医療者に感謝を』と言いますが、こういう

現実も知って、サステナブルな社会へとつなげていくつもりたいです」

と、根本さんが真摯に聞かれます。

さらには、長引くパンデミックによって、サステナブルとは真逆の「分断」があちこちで起こっているのも事実です。

根本さんは、

「コロナ禍の後で、もう一度つながりを取り戻していただきたい。幸いにも、コロナ禍のステイホームのなかで、より多くの人は、



自分が生きている環境や社会について省みる時間が増えてきたと思います。そのせいか、サステナブルやSDGsについても、関心を持つ人が増えたようです」

と、期待をこめます。

とはいえ、まだまだ17あるSDGsの目標のうち、環境についてのカテゴリーに偏っていると言います。

「レジ袋を受けとらずにマイバッグを持参するとか、プラスチックのストローをやめて紙製のストローを使うとか。ひとつひとつの取り組みには、意味があるでしょうし、大切なことだとは思いますが、どうしても蝸壺的な狭い取り組みになりがちです」(根本さん)

誰ひとり取り残さない 社会を目指して

SDGsやサステナブルをPRする立場にある根本さんご自身は、どんな取り組みをされているのでしょうか。

「私は食いしん坊なので食に関心があります。おいしいものが大好きだからこそ、フードロスをしないように心がけたり、地産地消できるものを買うようにしています。食をつきつめていくと、飢餓の問題、貧困の問題、生産者の姿勢や流通などの問題に辿りつきま

す。こうして、どんどん紐づけるように関心を深めてもらえると、サステナブルが暮らしに根づいていくと思います」

ファッションもショッピングも好きな根本さんは、

「私は読者のみなさんと同世代。洋服は好きでたくさん買いました。それでも、1着ずつを大切にしています。(取材中に身に着けていた)この鮮やかな赤のトップスはもう20年近く愛用しています。これは長く着られるか、ほんとうに必要なものか、と問いかけながら買い物するようになりました。

着なくなった洋服は、職場にもつてきて若いスタッフが気に入れば譲ります。循環させるのが、サステナブルなアクションです」

こうした個々の取り組みを積み重ねていけば、SDGsが達成できるとは、もう間に合わないところまで来ています。システムと

「ひとりひとりの小さなアクションだけでは、もう間に合わないところまで来ています。システムと社会の枠組みに訴えかけないと、気候変動も止まらないし、水もなくなります」

たとえば、気候変動に関するパ

リ協定で示された世界の平均気温を産業革命以前の気温から1.5℃に抑える努力をしようという「1.5℃ライフスタイル」を実践するためにZEH(ゼロ・エネルギー・ハウス)が開発されました。太陽光発電や蓄電池システムを設置して、創出エネルギーが消費エネルギーを上回るように設計された住宅が、いま注目を集めています。

「地球温暖化による気候変動は、待ったなしの大きな問題です」

今夏も、世界各地で40℃を超える熱波が続き、スペインやカリフォルニアで大規模な山火事が起こりました。日本でも線状降水帯が発生し、各地で洪水が起こったことは記憶に新しいでしょう。

「解決に導くには、まずは興味を持っていただきたい。地球のどこかで起こっていることではなく、自分のこととして。私もアナログ人間ですが、デジタルも取り入れてさまざまなアクションを起こしています。これからも同世代の読者のみなさんと一緒に、取り組んでいきたいと思っています」

それがSDGsの理念である「誰ひとり取り残さない社会」につながっていくでしょう。